Ⅱ　本年度の研究内容

1　学ぶ意欲とは

自ら学び続ける子どもは，新しい問題解決の場面に出合ったとき，これまでの経験を生かそうとし，その中で，自分自身の学びを応用したり転移させたり，発展させたりする喜びや楽しさを味わっている。子どもたちは，その喜びや楽しさを味わいながら，学習内容を確実に身に付けていくことで，学ぶ価値を実感しながら学び続けていけるのである。つまり，学ぶ意欲を高めていった子どもたちは，学ぶ価値を実感しながら自ら学び続けることになるのである。

ここでいう学ぶ意欲とは，本校で考えている「関心・意欲，態度」（Ｐ３表１参照）に含まれるものであり，授業創造の視点から学習場面における子ども自ら学ぶ意欲と置き換えられる。そして，これらは，**三つの培いたい力を子どもの内面から支えている原動力**であると考える。

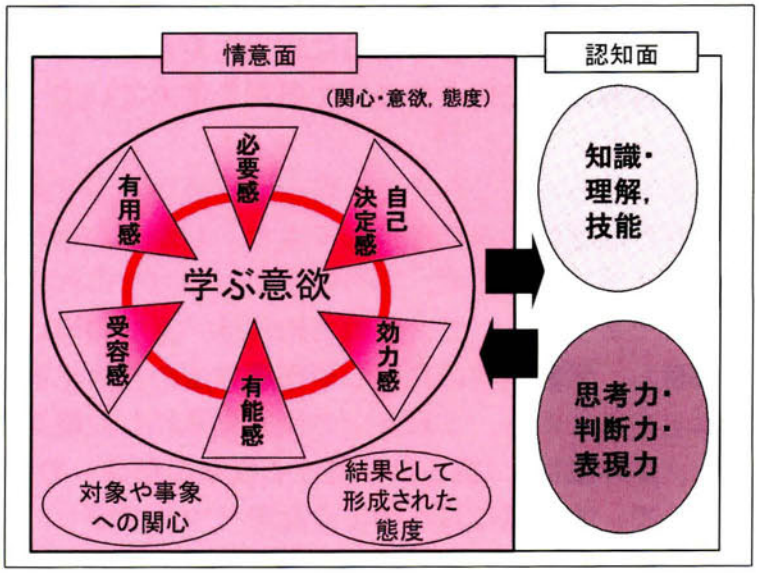
学ぶ意欲を内面から支え，子どもたちが問題解決を図ろうとする際に感じる喜びや楽しさのエネルギーとなっているものが，学びに対する有能感，効力感，自己決定感，必要感，有用感，受容感等の学ぶ意欲の基になる感覚である。

【表２　学ぶ意欲の基になる感覚の基本的な考え方】

学ぶ意欲の基になる感覚	
有能感	子どもの実態に応じた最適な学習目標を努力によって達成したとき感じる「自分なら頑張ればできる。」という感覚。（学んだことで自分の成長を感じるとき）
効力感	わかるようになっていったり，できるようになっていったりする過程で経験するわくわくするような感覚。（学んだことが自分の生活や次の学習に生かされるとき）
自己決定感	自分の行動を自分で決めて実行しようとする感覚。（自分が学習を創り出すことに，素晴らしさや自信，価値を感じるとき）
必要感	学習における様々な条件を切実に受け止め，その条件を積極的に成し遂げようとする感覚。（社会的・制度的条件にこだわりを持って学ぶときや環境からの要求に応じて意欲が生じるとき）
有用感	自分のよさを認め，自分を肯定的に受け止めることができる感覚。（自分が所属する集団から，承認･賞賛･感謝･支持等を受けるとき）
受容感	自らの考えが，他者（友達，教師，追究対象）に受け入れられ，自分の学びが周囲の人々によって支えられているという感覚。（友達や教師との学び合いができるとき）

子どもたちは，学ぶ意欲が高まることで，三つの培いたい力をより高めていく。その際，これらの感覚を**相互に関連させながら**学び続けている。

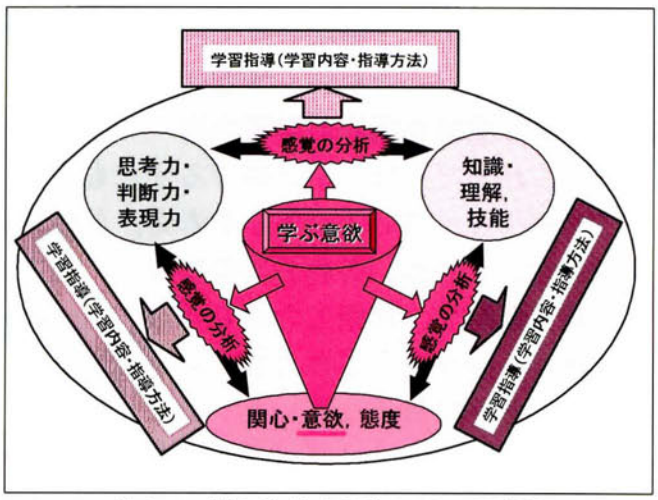
また，学ぶ意欲は，情意面（「関心・意欲，態度」）だけに着目していてはその高まりは十分望めない。**情意面と認知面（「思考力・判断力・表現力」「知識・理解，技能」）の双方向の関係にも着目**して考えていく必要がある。なぜなら，認知面を指導する場合には，それに関連した情意面の喚起が必要であり，逆に，深い理解に基づいた知識や習得した技能，思考活動による学習体験が情意面の一層の喚起を促すからである。**学ぶ意欲が高まっていく姿は，子どもが学ぶ意欲の基になる感覚を相互に関連させながら，学ぶ価値を実感し，よりよく分かったりできたりしていく姿**であるといえる。



【図４　学ぶ意欲と認知面との関係】

2　学ぶ意欲を高める学習指導とは

学ぶ意欲が高まった子どもは，同時に三つの培いたい力を高めていく。そして，その高まった姿は，三つの培いたい力を高めていく過程で，「関心・意欲，態度」に表出してくる（1年次研究）。そこで，1年次に**設定した子どもの姿に対して，それぞれの教科等で，学ぶ意欲の基になる感覚を着眼点とし，子どもの高まった姿を分析する**ことで，三つの培いたい力が確実に身に付けられているかが分かる。

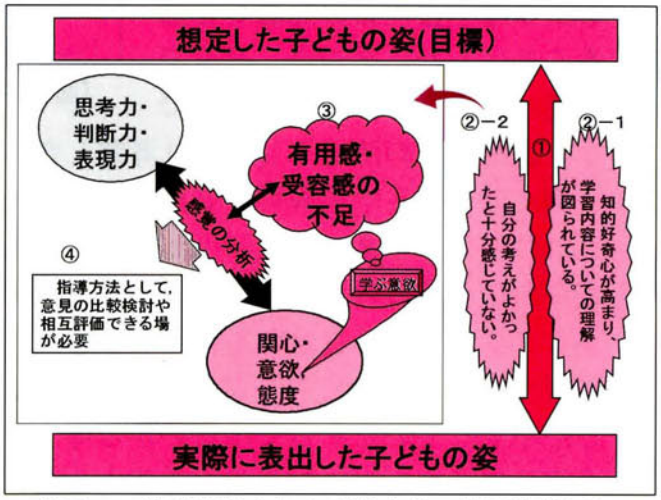


【図5　学ぶ意欲と認知面との関係】

想定した姿に対して確かに高まった姿が見取れたときは，2年次に設定した学習内容を確実に定着させるための具体的な指導方法（評価方法も含む）を吟味していく（2年次研究の踏襲）。

また，子どもたちの姿が想定どおりではなかった際は，図5のように**学ぶ意欲の基になる感覚のどの部分の高まりが不足しているかを分析し，その視点から学習内容を見直し，その学習内容の確実な定着のための指導方法を吟味**していく。

図5で示す学習指導の設定についての具体例を第6学年社会科「平和で豊かな社会を目指して」の学習で述べる（図6）。これまでの研究の考え方から，三つの培いたい力の分析により「戦後の人々が不断の努力をして復興を成し遂げた。」という学習内容を設定した。この学習内容の下で授業を行ったところ，戦後の人々の不断の努力について知りたいという知的好奇心は高められ①，復興を成し遂げた人々の思いや願いについての理解がなされた。②－1



【図6　学ぶ意欲を高める社会科の学習指導例】

このことから学習内容に関しては妥当であったといえる。しかし，単元の「まとめる」過程で，「自分の考えと友達の考えを比較することで違う考えが生まれたと気付き，他のいろいろな人の考えも聞いてみようとする。」という自ら学び続ける姿を想定したのに対し，実際の授業では，想定した姿は，十分表出しなかったと見取った。②－2そこで，その理由を学ぶ意欲の基になる感覚から分析していくと，「自分の考えがこれでよかったんだ。」という有用感・受容感を味わわせることが不足したからだと考え，授業実践を行い，その妥当性を明らかにした。③

つまり，この単元では，指導方法における友達と互いの考えを比較検討する場を設定する必要があったのである。④

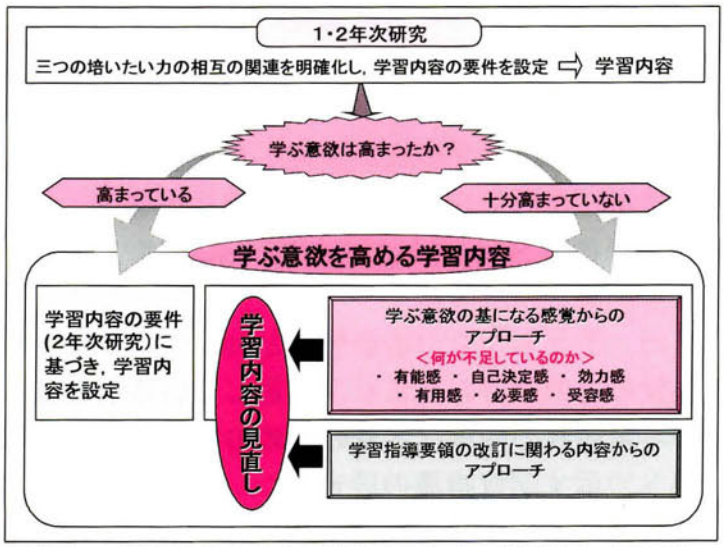
以上のように，**学ぶ意欲を高める学習指導とは，三つの培いたい力を確実に高めるための学習内容や指導方法のことである。**

3　学ぶ意欲を高める学習指導の具体化

子ども自ら学ぶ意欲を高めていく学習指導を行う際，**三つの培いたい力を高めていくために，「目標（目指す子どもの姿）」「学習内容」「指導方法」を具体化していく**ことが大切である。そこで，１年次研究で明らかになった自ら学び続ける子どもの姿により近づく授業改善をしていくために，**学習内容の見直しと指導方法の具体化**を図ることにした。

(1)　学ぶ意欲を高める学習内容

これまで，自ら学び続ける子どもの姿の表出に向けて，三つの培いたい力がそれぞれどうなっているべきかを考え，各教科等ごとの着眼点を基に学習内容の設定をしてきた。しかし，各教科等の全単元・題材で，目指した自ら学び続ける姿が表出されたかというと，そうは言えなかった。そこで，図７のように**学ぶ意欲の基になる感覚に着目し，学級全体の傾向として，その中のどの感覚が不足しているのかを明確にし，現在不足していると考えられる感覚を重点的に味わわせるような学習内容の見直しを図る**ことにした。その際，Ｐ５でも述べたように，情意面だけでなく認知面との関連もしっかり考慮したものにする。



【図７　学ぶ意欲を高める学習内容設定の基本的な考え方】

例えば，第５学年理科「気温の変化と天気」において，これまでの学習内容では，天気の変化のきまりを見い出しても，それを生かして天気の変化を予想しようとする姿があまり見られなかった。その原因を，学んだことを実際の生活に生かす中で味わうことのできる「自分にも天気が予想できるようになったぞ。朝，傘を持っていくか判断するときも空を見て判断しよう。」というような有能感や効力感を味わわせることが不足していたからではないかと考えた。そこで，単元のまとめの場面で，午前中の空の様子から午後の天気を予想する学習内容を設定したところ，知識を意欲的に活用しようとし，きまりを再確認する姿が見られた。

また，今回の学習指導要領改訂では，改正教育基本法等で示された教育の基本理念を踏まえ，現在の子どもたちの課題への対応の視点から，次のようなポイントを示している。　　（新小学校学習指導要領より）

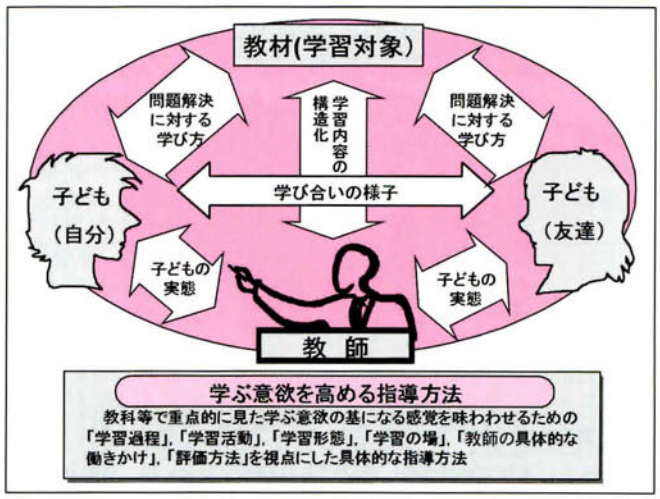
◎　「生きる力」という理念の共有
◎　基礎的・基本的な知識・技能の習得
◎　思考力・判断力・表現力等の育成
◎　学習意欲や学習習慣の確立
◎　豊かな心や健やかな体の育成のための指導の充実

このことは，自ら学び続ける授業の創造を追い求めるわたしたちの，三つの培う力を確実に育てようとする研究（Ｐ３参照）と方向が合致している。よって，**各教科等で示された学習指導要領の改訂に関わる内容についてもこれまでの研究を生かし，学習内容の設定を行う**ことにする。ただし，基本的には，これまでの学習内容設定の考え方の充実を図っていくことにする。

(2) 学ぶ意欲を高める指導方法

見直した学習内容を確実に子どもに定着させる指導方法とは，子ども自ら学ぶ意欲を高めていくプロセスにおいて，教師が準備しておくものである。

わたしたちは，図８のように，子どもの思考の流れに沿って，学習内容を構造的に配置したり，他（教材，教師，友達）との学び合いを通して，子ども自身が学ぶ意欲を高める姿を想定したりして指導方法を柔軟に位置付けていくことが大切であると考えた。

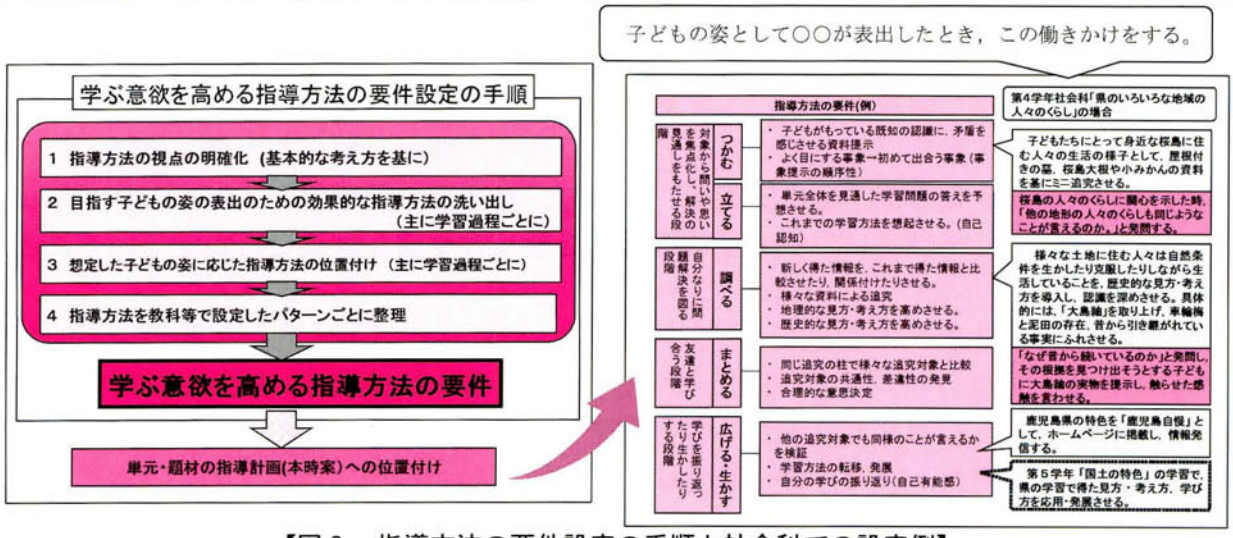


【図８　学ぶ意欲を高める指導方法】

その際，**学ぶ意欲を高める指導方法を，表３のように教科等で重点的に見た学ぶ意欲の基になる感覚を味わわせるための「学習過程」，「学習活動」，「学習形態」，「学習の場」，「教師の具体的な働きかけ」，「評価方法」という視点で考えていく**ことにした。さらに，その指導方法の視点で考えた指導方法を具体的に各単元・題材の指導計画や本時案に位置付けるために，図９のような手順で，**学ぶ意欲を高めるための指導方法の要件を設定する**ことが大切であると考えた。

【表３　学ぶ意欲を高める指導方法の視点の基本的な考え方】

指導方法の視点	視点の基本的な考え方
学習過程	・　学ぶ意欲を子ども自ら高めていくプロセスを柔軟に構成 （「つかむ」「見通す，立てる」「調べる・つくる・工夫する」「まとめる」「振り返る」「生かす・広げる」過程）
学習活動	・　学ぶ意欲を高め続け，学ぶ価値を実感できる子ども同士の学び合いが生まれる学習活動
学習形態	・　学ぶ意欲を高めながら学ぶ価値を実感し，見方・考え方・感じ方を深めたり広げたりできるよう，よりよく学び合える学習形態
学習の場	・　学ぶ意欲を高め続けていけるように，自己認知したり学ぶ価値を実感したりできる環境設定や場の構成
教師の具体的な働きかけ	・　子ども一人一人が学ぶ意欲を高め，自ら学び続けているという視点から見取った子どもの姿に応じた発問・助言，資料提示，板書等
評価方法	・　学ぶ意欲を高めているかを見取るために，問いかけ等により，子どもの行動や言葉のように表出しやすい状態にし，見取りの視点の基に行う評価 ・　見取ったことは授業中に個に応じて指導する。また，次時の授業構成の参考にする。 ・　学ぶ意欲を高める自己評価相互評価による学習の振り返り



【図９　指導方法の要件設定の手順と社会科での設定例】

各教科等で位置付けた指導方法の具体例を示すと表４のようになる。詳細は，Ⅲ章の各教科等の研究を参照する。

【表４　各教科等の学習内容と関連させた指導方法例（一覧）】

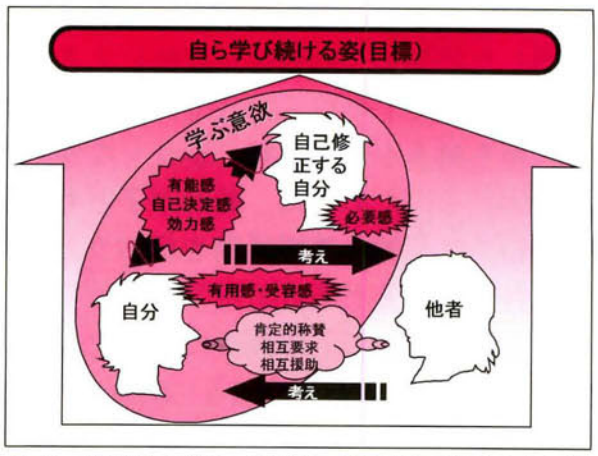
教科等	具体的な指導方法	学習内容との関連
国語科	○　効果的な書く活動で収集した材料や書いた下書き等について，同じ観点で伝え合う活動の設定	○　効果的な書く活動で書いた下書きや作品を，ことばで伝え合わせることで，教師のモデルや話し合いから学習したことが生かされていることを感じ，効力感を味わうことができる。
社会科	○　社会的事象に対する認識を深めるために，自分が学んだことを基に，討論の場を設定	○「賛成か」「反対か」等の異なる２つの立場で自分の考えを主張させる。その際，自分が追究してきたことについて，根拠をはっきりさながら討論を行うことで，学びに対する有能感や友達から受け入れられる受容感を得たり，これから追究しようとする方法について自己決定感を得たりすることができる。
算数科	○　考えの根拠となった生活経験・学習経験を想起させる場や，学習したことを活用できそうな場面について話し合う場の設定	○（小数）×（整数）の問題場面で解決を図る際に，既習の（整数）×（整数）の場面を想起させたり，未習の（分数）×（整数）の場合にも適用できるか考えさせたりすることで，必要感や効力感を味わうことができる。
理　科	○　結果と方法についての見通しをもたせ，その妥当性について吟味しながら追究する場の設定	○　夕方の天気を予想する学習では，天気の変化の要因とそれを調べる方法という見通しをグループ毎に予想ポイント表として掲示し，観察結果や他グループの考え方と比較することで，その妥当性を判断させることが，学習問題の解決に近づいているという効力感をもたせることができる。
生活科	○　生きものの生命を実感させるために，生きものと触れ合う活動において子ども同士の交流が生まれる場の設定	○　ウサギと触れ合う学習で，ウサギの生命を感じることができた子どもが，活動を通して持った「自分にもさわれたよ。」「だっこできたよ。」という効力感を基に，まだ触れ合うことができていない子どもへのかかわりを通して有能感や受容感をもたせることができる。
音楽科	○　途中で曲想を変化させることで場面が変化することが分かるような範奏を聴く活動の設定	○　途中で音楽が変化することで，場面が変化していることに気付き，「自分たちもつくってみたい」というあこがれをもつことができる。また，途中で音楽を変化させることへの自己決定感や効力感を味わうことができる。
図　画 工作科	○　表現課題を解決できるような，適時性を基にした活動の設定	○　つくりたいものをつくる領域の題材では，導入場面でやって気付く鑑賞活動を設定することで，題材の価値に気付き，有能感を味わうことができる。また，表現場面で，中間鑑賞活動を設定することで受容感を味わうことができる。
家庭科	①　自分の家庭生活に応じた課題設定に基づく課題別学習 ②　住生活に関する同じ課題ごとにつくったグループ構成	①「自分の部屋は暗い。」といった実態から「明るさ」についての課題を選択し追求する中で，実際に物を置かないと明るい等の結果を得ると，自分の家庭生活に生かせるという効力感を味わうことができる。 ②　同じ「明るさ」という課題を選択した友達と追求することで，友達に支えられているという受容感を味わうことができる。
体育科	○　互いの動きの模倣を取り入れた活動の導入やグループごとの練習の場の設定	○　準備運動段階の類似運動や運動Ｉでチームごとに練習を行うことで，技能を中心に高め，「自分にもできる」という有能感や「この練習をしてみたい」という自己決定感を味わうことができる。また，目指す運動の姿を示すための示範や友達と動きを見合って行う模倣によって「そうかこうすればいいんだ」という受容感を味わうことができる。
道　徳	○　友達や資料に十分にかかわりながら考えていくことのできる形態や場の設定	○　友達とともに，意義や心構え，弱さについて話し合う活動を十分に行わせることで，道徳的価値のよさを感じるだけでなく，そのよさを感じるに至った自分の学びのよさや道徳的価値の見方・考え方・感じ方の深まりや広がりを実感できる。

これまで述べてきた指導方法が，より効果的に働くためには，子どもが学ぶ意欲を高めていくそのプロセスを見取るための教師の評価（診断的評価・形成的評価・総括的評価）に併せて，**有能感や効力感，自己決定感，必要感，有用感や受容感を子ども自身が味わうための自己評価や，学び合いの中で互いのよさを感じ合う相互評価を行わせていくことが大切**である。

わたしたちは，２年次の研究で，「関心・意欲，態度」に対する自己評価の基本的な考え方を確立した。具体的には，「関心・意欲，態度」を見取る際は，単元・題材において問いかけやかかわりを通して，子どもの行動や言葉のように把握しやすい状態にすることが大切であると考えた。また，発達特性に応じて段階的に自己評価する力を高めていくための組織的な取組として，各教科等で低・中・高学年と区切った自己評価の視点をカード

にし，活用してきた。(平成19年度研究誌参照)

本年度の研究では，これまでの自己評価の考え方を踏襲しつつも，**子ども自身の有用感や受容感に着目し，相互評価の基本的な考え方を明らかにしたい。**そのために，相手の考えや考えの状態を互いにとらえることができるように，**互いの考えのよさを認め合う学び合いの場を意図的に設定する**ことが大切である。そして，その学び合いの場において，子ども自身が互いの考えを表出し合い，教師が想定している自ら学び続ける子どもの姿に照らして，**子ども自身が互いの考えについて肯定的な称賛をしたり，三つの培う力のより確かな発揮を目指して相互に要求し合ったり支え合ったりしながら評価していく**ことが大切であると考える。



【図10　学ぶ意欲を高める自己評価・相互評価の基本的な考え方】

このような相互評価は，**子ども自身の自己評価力をさらに高めることにもつながり，学ぶ意欲を高め合い，三つの培いたい力を確実に身に付けていくことにもつながる**のである。また，この相互評価は，単独で行うことはせず，自己評価と関連付けてカードやワークシート等で行ったり，互いに会話したりすることが大切である。

【表５　各教科等の具体的な評価方法例（一覧)】

教科等	具体的な評価方法
国語科	○　効力感や受容感を味わわせるために，効果的な書く活動におけるモデルや学習を通して理解させた観点（構成，文末表現等）に基づいて，自己評価や相互評価を行わせる。
社会科	○　振り返りカードで，有能感，受容感を味わわせるために，自分が追究して分かったことを「立てる」過程での予想と比較して見取る。また，自分の追究した内容や方法について友達がどのように発言したか等を記入させ，意欲の高まりの様子を見取る。 ○　ウェッビング図による評価で，有能感，自己決定感を味わわせるために，単元の前・中・終末に実施し，社会的事象に対する見方や考え方の広がりや深まりを感じさせる。さらに，互いに紹介し合うことで，有能感を味わわせ，今後の自分の学習に生かすことができるようにする。
算数科	○「何がわかったのか」「なぜわかったのか」「どんなよさを感じたか」「よさだと思うのはなぜか」など，生活への活用に関わることについて重点的に評価し，必要感や効力感を味わわせる。 ○　振り返りの場面では，評価の観点を明確にし，子ども自身が何を振り返ろうとしているのかについてはっきり分かるようにする。そのために，教師は子どもに何をとらえさせたいのか，何に着目させたいのかを常に意識しておく。
理　科	○　見通しをもつ場面で記入したカードを掲示し，事実と比較し考えをつくり出していく際に，相互評価によって客観的な評価データを蓄積させていく。そして「振り返り・生かす」過程で自己評価カードを用いて自らの学びの過程を振り返らせ，内容的価値と方法的価値が高まったという有能感を味わわせる。
生活科	○　活動中や活動後に，友達の対象へのかかわり方のよさに目を向けさせ，友達からの称賛や励ましから，受容感や有用感をもたせる。 ○　活動後は，活動できた自分自身についてワークシートで必ず振り返らせ，「自分にもできたぞ」という有用感や有能感を味わわせる。
音楽科	○　イメージが膨らんだという効力感を味わわせるために，範奏を聴いてイメージがどのくらい膨らんだかを発表や学習カードで見取る。 ○　イメージと音楽の要素とを結び付けられたという有用感を味わわせるために，どのような結び付け方をしたのかを，活動中に尋ねる。
図　画 工作科	○　学習カードを活用して，子どもたちのやる気を見取ったり，中間鑑賞をしたい時期を子ども自身に判断させたり，工夫したこと等を記述させたりし，有能感等を味わわせる。 ○　中間鑑賞活動や題材終末活動の場において，自分や友達の作品を見るポイントを基に鑑賞したり，作品で一緒に遊んだりしながら，互いの表現のよさに気付けるようにする。
家庭科	○　有能感や効力感を味わわせるために，振り返りカードに分かったことや追求の視点を見取る自由記述をさせたり，分かったことを生かして実習させたり，食べて確かめさせたりする。 ○　有用感や受容感を味わわせるために，調べて分かったことを実演させたり，どのように家庭生活に生かせるのかを話し合わせたりする。
体育科	○　互いの動きを見合い模倣し合うなど，他者と関わる中で受容感を味わう相互評価の充実を図る。そして，それを有能感や自己決定感を味わえるように自己評価にも生かす。 ○　学習カードや体育ノート等での学び合いを通して，友達や自分のよさを相互・自己評価をさせる。
道　徳	○　自分の学びに対する有用感を味わうために，道徳的価値に対する見方・考え方・感じ方を，どのように深めたり広げたりしてきたか実感させたり，生き方と関係付けて振り返らせたりする自己評価・相互評価を行う。

さらに，子どもたちの学ぶ意欲を高め，学習内容の確実な定着を図るためには，ねらいに即した効果的・効率的な教師による指導が大切である。教師は，学び続ける子どもたちの具体的な姿を見取り，教師の思いや願いと子どもたちの思いや願いが一致するように，あらゆる働きかけを柔軟に駆使しながら価値ある学びを子どもたちに味わわせなければならない。そのためには，**教師が子どもの実態をしっかりと見極め，指導する教科の本質を追究し，効果的な教授活動を行おうと日々研鑽することが大切**であると考える。そこで，各教科等に必要と考える授業に対する教師の姿勢を表６のように「授業づくりにおいて」と「授業において」の観点から整理してみることにした。

【表６　各教科等で必要と考える教師の姿勢（一覧）】

教科等	授業づくりにおいて	授業において
国語科	○　ねらいに応じた内容的・技能的価値を子どもが明確に意識できるモデルを作成しようとする。	○　子どもたちが書いている作品の内容的価値だけでなく，順序や構成，表現の工夫等の技能的価値を肯定的に称賛しようとする。
社会科	○　ねらいに即して，資料の中の必要な部分だけを抽出したり視点を変えたりするなど，効果的に加工しようとする。 ○　発達段階に合わせた思考の流れを想定し，学習内容を構造化しようとする。	○　資料提示を子どもの思考と意欲を考慮して，効果的に行おうとする。 ○　多様な考えや意見を認め，事実を関連付け，中心概念に迫らせるように「事実に共通することはどんなことかな。」等の発問をしようとする。
算数科	○　身に付けさせたい数学的な見方・考え方について深く理解しようとする。 ○　各学年各題材の内容（知識・技能，見方・考え方）の系統を構造的にとらえ，題材間のつながりを考えようとする。	○　一見，学習のねらいとは外れているようなつぶやきにも敏感に反応し，学習内容と関連付けて的確に対応しようとする。 ○　計算の原理や公式の意味などを深く考えさせようとする。
理　科	○　教材に対する子どもの素朴概念と教材の特性から科学する楽しさを考え，実験方法等を改善しようとする。 ○　中心概念をよりよく構築するために学習内容を子どもの思考の流れに沿って構造化しようとする。	○　実験・観察の視点や方法を焦点化し，十分な試行錯誤をうながしながら事実を基にした考察をさせようとする。 ○　机間指導や全体指導において発言や行動を適切に見取り切り返すことで，子どもの科学的な思考を発揮させようとする。
生活科	○　具体的に子どもの活動や発言等を想定し，自分自身が子どもの学びを高めることを楽しみながら，ねらいに即した環境設定を行うことができる。	○　子どもの目線で話したり考えたりして，子どもと一緒に活動を楽しもうとする。 ○　一人一人の思いや願いを見取り，温かく見守る。また，問いかけやかかわりを通して，子どもの姿や考えを価値付けたり意味付けたりする。
音楽科	○　教師や子どものイメージを基に，範奏となる音楽をつくろうとする。 ○　範奏を聴いて，子どもたちが膨らませるイメージを数多く想定しておこうとする。	○　音楽づくりの進まないグループへ参考となる音楽を即興的に演奏しようとする。 ○　アイデアのなかなか浮かばない子に対して多様なアイデアを提供したり共感的な受け止めをしたりする。
図　画 工作科	○　子どもの表現過程を想定し，表現課題を解決できる学習内容と方法を設定する。	○　どの子のどんな表現も受け止め，学習のねらいに沿って造形的な要素で価値付けようとする。
家庭科	○　学習内容を経済性や審美性などの追求の観点からとらえ，生活の総合化を図れるように構造化する。 ○　子どもが家庭生活に生かせるような追求に対応できるような教材を開発しようとする。 ○　科学的根拠に基づいて説明できるように，学習内容の価値を深く理解しようとする。	○　子どもが，自分の家庭から課題を見付けてこられるように投げかけようとする。 ○　全体での話し合い活動において，集めた情報を関連付けたり，価値付けたりしようとする。 ○　課題設定から学習したことを家庭生活に生かすまで，個々の家庭生活に応じてアドバイスしようとする。
体育科	○　子どもの運動技能の実態を把握したり目標とする動きに向けて類似運動を分析したりしながら，技能に応じた場の設定やグループ編成を考えようとする。	○　中核となる動きのポイントを子どもの動きに応じて提示したり，自分の動きをイメージ化させられるような示範や言葉かけを行ったりしようとする。
道　徳	○　道徳的価値の分析を行い，生活場面や子どもの意識から学習内容を設定し，共感的にかかわる働きかけを具体化しようとする。	○　子どもの道徳的価値への見方・考え方・感じ方の深まりや広がりを実感させるとともに，これからの生活に，夢や希望をもつことができるような働きかけをしようとする。